

比較級 and 比較級構文についての一考察

阿戸 昌彦
(Masahiko ADO)

1. はじめに

英語には and で同じ語を繰り返すことで何らかの強調を表す表現がある。

- (1) a. i. The noise grew louder and louder.
ii. She felt more and more confident.
iii. He was showing less and less interest in his family.
- b. i. I laughed and laughed and laughed.
ii. I've told you about it again and again.
iii. It went up and up and up.
- c. i. I made dozens and dozens of mistakes.
ii. It rained for days and days.

(Huddleston and Pullum (2002:1304f.))

(1a)では比較級や more/less の繰り返しで「次第に増大・減少 “progressively more/less”」を意味する。(1b)は動詞、副詞、前置詞の繰り返しでずっと継続したり繰り返されたりすること、(1c)では名詞の繰り返しで数量が大きいことを意味するという。

本小論では、(1a)に見られる、形容詞・副詞の比較級形が and で結ばれる表現を取り上げる。等位接続詞 and の前後に比較形が現れるので、便宜的に Comparative and Comparative 構文(C and C 構文)と呼ぶことにする。¹ また、and の前の比較形を C1、後の比較形を C2 と呼ぶことにする。

C and C 構文は Murphy et al (2018) や Eastwood (2007) といった基本的な文法教科書

にも取り上げられるよく知られた構文であり、解釈について以下のような言及といくつかの例文が示される。これは、Quirk et al (1985)や Huddleston and Pullum (2002)をはじめとする主要な文法書についてもほぼ同様である。

(2) a. Something is changing continuously. (Murphy et al (2018:206))

b. Something is increasing all the time. (Eastwood (2007:266))

(3) She is getting better and better. [increasingly better] (Quirk et al (1985:467))

Quirk et al (1985: 467) で注釈がつけられているように、同じ語の比較級が and で結ばれ、繰り返されると「だんだん…」 「よりいっそう・・・」という漸次的な変化の解釈になる。これは、2つ(以上)の比較級の形容詞を等位接続しただけでは得られない、C and C 構文の大きな特徴である。

何故、C and C 構文では漸次的な変化という意味と「同じ語」の「比較級」の繰り返しという形式が結びつき、異なる語の比較級の等位接続ではそのような解釈との結びつきがないのであろうか。

本小論では、比較級の語の等位接続と C and C 構文は異なる構造を持つことを提案する。前者は比較級の語(形容詞ならば DegP)の等位接続であり、後者である C and C 構文は比較要素 (Deg) の繰り返しであるとする。そこには、英語において、迂言的比較が 15 世紀になって広く用いられるようになったという歴史的な変化が少なからず関係しているのであろう、という点から考察をする。

2. Comparative and Comparative 構文の特徴

まず、現代英語に観察される C and C 構文のいくつかの特徴を示しておく。

[1] C1 と C2 は同じ語でなくてはならない。

And に結ばれた 2 つの比較級が C and C 構文として漸次的解釈を持つときには、同じ語の比較級の繰り返しでなくてはならない。(4)のように、異なる語の比較形が and で等位接続されることは可能であるが、それぞれの語が独立した解釈をもち、「次第に・・・になる」という解釈にはならず、C and C 構文とはならない。

(4) a. Faculty can then use this valuable information to reinforce their teaching to help make student learning more efficient and more effective (Cooper, 2005).

(COCA 2008 ACAD)²

b. More specifically, evidence dating back three to four million years indicates males have been and continue to be physically larger and stronger than females.

(COCA 2014 ACAD)

(4a)では、似た意味の2語が結ばれているが、「より効果的に、そしてより効率的に」という、それぞれの語の解釈を並列することにしかならない。また、(4b)でも「より大きく、そしてより強く」という並列の解釈にしかならない。

比較級ではない同じ形容詞、副詞が and で結ばれることはまれである。COCA で C and C 構文に現れる形容詞で最も多い big と high についてみると、その例の検出数の差は歴然である。

(5) bigger and bigger	890	big and big	0
higher and higher	868	high and high	2

このことから、重要なのは C and C 構文は単に同じ形容詞や副詞を繰り返しているものではなく、C1 と C2 が同じ語の「比較級」であることだといえる。

[2] 迂言的比較級の場合には more を繰り返し、全体を繰り返すことはしない。

よく知られているように、現代の英語には接尾辞比較と迂言的比較があり、音節数が多い形容詞、副詞は迂言的比較で more を取ることが一般的である。例えば、3音節の形容詞 difficult や副詞 frequently の比較級はそれぞれ more difficult, more frequently である。これらが C and C 構文に生じるときには more difficult, more frequently 全体の繰り返しではなく、more の部分だけを and で結ぶ。³

(6) a. The calculation errors became more and more difficult to correct. (COCA 2018 FIC)

b. The team started to play more and more aggressively.

(Carter and McCarthy (2006:771))

(7) a. *She felt more confident and more confident. (Huddleston and Pullum (2002:1305))

b. We're going more and more slowly. (NOT...more slowly and more slowly)

(Swan (2017 sv 206.4))

Huddleston and Pullum (2002) や Swan (2017) が示すように、比較級全体の繰り返しは C and C 構文としては非文となる。このことから、C and C 構文であることについて比較級の語の繰り返しというよりも、「比較を表す要素だけ」の繰り返しが重要であることをうかがわせる。

[3] C and C 構文の and は省略されない。

通例の等位接続であれば、3 つ以上の等位項があるときに、最後の and 以外は省略することができる。

(8) a. His principal, a 53-year-old third cousin with experience as a teacher, an engineer and a real estate agent, makes \$ 52,000. (COCA 1998 NEWS)

b. To make the word obsolete, he said, black people need to gain significant social, economic and political power in America. (COCA 2007 NEWS)

一方、C and C 構文では、すべての and が省略されずに現れていなくてはならない。⁴

(9) a. We get more and more and more creative. (COCA 2004 NEWS)

b. Her beloved, whom she once saw at normal size, starts growing larger and larger and larger, and in a matter of hours he becomes the Mount Everest of desirability and she is inconsolable. (COCA 2008 FIC)

C and C 構文の成立には and が存在していることが何らか条件となっているとしなければならないであろう。

[4] than とは共起しない。

一つしか比較級のない単純な比較の文では than を用いて比較対象を表すことは何ら

おかしくない。ところが、C and C 構文では、まったく例がないわけではないが、*than* 句と共起することは極めてまれである。⁵ 以下は、COCA で C and C 構文に生ずる最上位の形容詞 *big* と *high* について *than* が共起するかどうかの頻度を比較した結果である。

(10)	<i>bigger and bigger</i>	890	<i>bigger and bigger than</i>	0
	<i>higher and higher</i>	868	<i>higher and higher than</i>	0

日本語では「X よりますます・・・になる」ということはよくあるように思われるが、英語ではそうではないようである。異なる文脈ではあるが、Zwarts et al (2005) は次のような例を挙げている。2つのものを比較する場合には *than* と共起する(11a, 12a)。ところが、*than* で比較対象が示されると、(11b), (12b)のように漸次的な変化を表す解釈となるような比較級の繰り返しは許されない。

(11) a. This year's match was easier than last year's match.

b. *This year's match was easier and easier than last year's match.

(12) a. The match was easier than last year.

b.*The match was easier and easier than last year.

(Zwarts et al (2005:2))

同じ比較級を繰り返せるのは C and C 構文の意味になるときだけであり、その時には *than* は共起できない。C and C 構文の[C1 and C2]は *than* によって導かれる比較対象要素との比較を意味しておらず、時間的に変化が生じていることしか意味しないことが理由として考えられる。

本節に示したように、C and C 構文は形式的にも意味的にも特徴的である。この構文がどのような構造をもつのか、どのようにその構造に至ったのか、どのようにこの解釈を持つことになったのか、という多くの疑問が生じてくる。

3. C and C 構文の歴史

本節では、いつ頃から C and C 構文が英語で用いられるようになってきたのかをみ

ることにする。

C and C 構文の歴史は古く、古英語の時代にはすでに and の用法の一つとして確立していたようである。OED からの定義と、例文の中の最も古い 2 例を抜粋すると、以下ようになる。

3. Connecting occurrences of the same member, expressing continuous repetition.

b. Expressing repetition to an indefinite extent: originally and frequently with comparative adjectives and adverbs, with certain adverbs of time, manner, degree, etc. (as for ever and ever, over and over, through and through), and with verbs; also more recently with units of time, space, capacity, etc. (as miles and miles ‘miles and yet more miles, miles upon miles, miles without number’).

OE *Seven Sleepers* (Julius) (1994) 45 And æfre swa hi near and near eodon, hi fundon ælcne stan on oðerne befegedne.

IOE *Anglo-Saxon Chron.* (Laud) anno 1085 Aa hit wyrsoðe mid mannan swiðor & swiðor.

(OED sv and 3)

1 例目 near and near eodon は went near and near, 2 例目の swiðor & swiðor は more and more と解することができる。⁶ 古英語からすべての時代にわたって調査することはできていないのであるが、15 世紀後半から 17 世紀末のイギリスの文献を集めた EEBO をみると、(品詞の区別は無視するとして) more and more という比較級の繰り返しの形が 15 世紀後半の文献には少なからず用いられていたことがわかる。⁷ EEBO を検索すると、1470 年代に 20 例、1480 年代には 30 例の more and more の用例が見つかる。

(13) this notwithstanding Iupiter ne was the lasse desirous for to see danes than he was to fore the malediccions ne curses myght not lette ne withdrawe his affeccions whiche grewe more and more: (EEBO 1474)

	1470s	1480s	1490s	1500s	1510s	1520s	1530s	1540s	1550s	1560s	1570s	1580s	1590s	1600s	
MORE AND MORE	14280	20	30	13	21	14	28	122	242	133	311	769	829	558	868

表 1 EEBO における more and more の検出数の推移(1470 年代から 1600 年代)

ところが、形容詞に絞って調べてみると、接尾辞比較級の形容詞の C and C 構文の形は、1480 年代から散見されるもののほとんど検出されない。多少なりとも検出される例の数が増えてくるのは 16 世紀半ば以降になってからである。

(14) a. but Syre gawayne fro it passed ix of the klok waxed euer stronger and stronger for
thenne hit cam to the houre of noone (EEBO 1485)

b. euery thyng shulde be worse and worse (EEBO 1525)

		1470s	1480s	1490s	1500s	1510s	1520s	1530s	1540s	1550s	1560s	1570s	1580s	1590s	1600s
WORSE AND WORSE	1333						6	13	16	7	22	45	53	39	74
HIGHER AND HIGHER	391								1		1	7	6	7	13
STRONGER AND STRONGER	320		1		1			4	3		3	5	8	4	6
GREATER AND GREATER	264								4	3	4	6	9	11	11
HIGHER AND LOWER	244											4	8	11	6
WEAKER AND WEAKER	196								1		4	5	5	4	9
GREATER AND BETTER	187								1		5	5	12	7	11
GREATER AND STRONGER	175								2	3	3	4	10	4	11
GREATER AND HIGHER	122								3	1	2	1	5	3	6
BIGGER AND BIGGER	118								2	1		4		5	6
	3350		1		1		6	17	33	15	44	86	116	95	153

表 2 EEBO における接辞型比較形容詞の場合の検出数上位 10 位の推移
(1470 年代から 1600 年代)

迂言型の「more 形容詞」の例がみられるのは -er を付ける接尾辞型よりも遅く、1520 年代までは 1 例も検出されない。検出される例の数が増え始めるのは 1570 年代になってからである。

(15) a. Nowe if your forefathers made this constitution, and yet thereby dydde nothyng, the
abuses euery day more and more encreased, what is left for you to do? (EEBO 1537)

b. but if the question be of the faculties, powers and vertues thereof, the seedes of which
it hath in it selfe, wee see by experience howe they shewe themselues more and more
perfect, and howe the vse of them is greater in one age then in an other: (EEBO 1594)

	1470s	1480s	1490s	1500s	1510s	1520s	1530s	1540s	1550s	1560s	1570s	1580s	1590s	1600s
MORE AND MORE INCREASED	67										2	3	5	8
MORE AND MORE INCREASING	54										2	3	3	7
MORE AND MORE ENCREASED	35						1	1	1	2	4	1	3	7
MORE AND MORE ENCREASING	32										1	2	4	6
MORE AND MORE PERFECT	23												1	
MORE AND MORE ASSURED	20										2		1	3
MORE AND MORE HARDENED	17													1
MORE AND MORE SENSIBLE	17													
MORE AND MORE HARDNED	14												1	
MORE AND MORE LIKE	14										1			2
	293						1	1	1	2	12	9	18	34

表3 EEBOにおける迂言型比較形容詞の場合の検出数上位10位の推移
(1470年代から1600年代)

資料の規模によるところが多いことは十分に考えられ、他のコーパス・資料の調査をしなければわからないことではあるが、*more and more* という表現以外に C and C 構文の形式がある程度の頻度をもって用いられるようになってきたのは 16 世紀半ば以降の可能性はある。

4. 仮説と考察

同一語の繰り返し表現が古英語の時代からあったにもかかわらず、16 世紀までは *more and more* を除けば、C and C 構文の頻度が比較的低かったのはどうしてなのか。16 世紀半ば以降という時期になって、ある程度の頻度で用いられるようになったのはなぜなのかを考えてみたい。

同一要素の繰り返しが何らかの強調を表すという大きな枠組みの中で、C and C 構文はそのうちの下位類の一つとして、比較(級)の繰り返しが漸次性という特別な意味と結びついた構文として成立してきたものと考えられる。Quirk et al (1985) をはじめ、ほとんどの文法書では C and C 構文は比較級の(慣用的な)用法として取り上げられている。これに対し、Huddleston and Pullum (2002) は(1)に挙げたように、and で同じ要素が繰り返される現象の一つとして C and C 構文を取り上げている。OED も and の定義として同じ要素の繰り返しで用いられる場合の例として比較級の繰り返しが挙げられている。ここで重要と思われるのは、何を繰り返すかによって、解釈が異なっていることである。例えば、名詞の繰り返しは数量が大きいことを表すが、漸次性は表さない。比較級の繰り返しは漸次性を表すが、数量が大きいことは表さないので

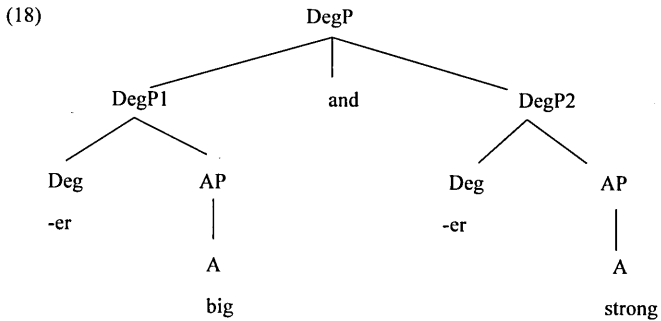
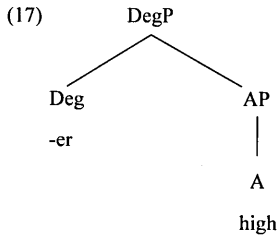
ある。

- (16) a. I worked with teenagers for years and years and heard over and over what a great place Abilene was to raise a family but a terrible place to be a kid. (COCA 2014 NEWS)
- b. She opened her mouth, and it seemed to get larger and larger, the teeth like sharp mountains and beyond them black smoke that swirled endlessly into darkness. (COCA 2017 FIC)

(16a)の years and years は「何年も」であり、「年を経るごとに」にはならない。(16b)の larger and larger は「次第に大きく」であって、「とても大きい」にはならないのである。

そこで、C and C 構文は何の繰り返しかということが問題となる。Larger and larger はなぜ C and C 構文となりうるのか、という問題である。注意しなくてはならないのは、形容詞の意味は漸次性には関わっていないということである。(16b)において、large という概念は繰り返しがあっても何ら変わらない。(実際には COCA に例はなかったが) large and large という形容詞の繰り返しでは C and C 構文にはなれない。Larger を構成する要素は比較要素(-er)と形容詞 large である。形容詞が関わっていないとすれば、残るのは比較の要素ということになる。つまり、C and C 構文は「比較要素」の繰り返しであるということになる。

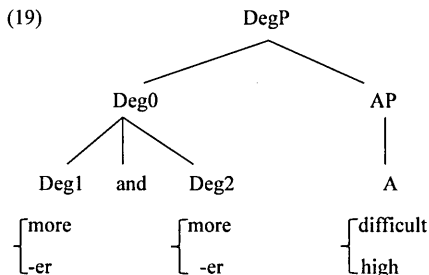
このことは英語の発達、変化とどのようにかかわっているのであろうか。一つの仮定を試みる。迂言型比較が英語で用いられるようになったのは 13 世紀以降のことであり、頻繁に使用されるようになったのは 15 世紀になってからのことだといわれている(宇賀治(2000), 安藤(2002))。形容詞の比較級 (higher) の構造を(17)のように語彙範疇 Adjective の上に機能範疇 Degree があり、比較を表す接辞-er が生起しているとすると、このとき、迂言的比較が英語に取り込まれるまでは、2 つの形容詞の「比較級 and 比較級」(bigger and stronger) は(18)のようであったと推測される。⁸



それぞれの比較接辞-er がそれぞれの形容詞と結びつかねばならず、どうしても DegP1 全体と DegP2 全体の等位接続になってしまう。

(18)のような構造は、DegP1 と DegP2 が同じ higher という比較級形容詞であっても、DegP1 が bigger で DegP2 が stronger という異なる比較級形容詞であっても区別することはない。DegP1 と DegP2 がたまたま同じ形容詞であるときに、その時に限って特別に漸次性を意味するとしなければならなかった。この構造では純粋に比較要素 Deg だけの繰り返しになっていないことは明らかである。このような状況では C and C 構文は成立していなかったと考えられる。

しかし、迂言的比較が用いられるようになり、Deg に比較要素 more が生じるようになると、形容詞と比較接辞の結合は必ずしも必要ではなくなってくる。独立して生起する Deg のみを and で結んだ(19)のような構造が生まれる可能性が出てきたのではないだろうか。



Deg1 and Deg2 からなる Deg0 は純粋に「比較要素」の繰り返しを表す形式であり、漸次性という特定の意味と 1 対 1 で結び付くことになったと考えられる。形容詞 A は必要に応じて、比較の接辞-er と結びつくために Deg0 に移動される。Deg0 は等位構造をしているために、Deg1, Deg2 両方について反映され、例えば *higher and higher* のような音形をもって具現する。

Deg0 に A が移動されて、Deg1 と Deg2 両方に同じ形の比較級形容詞が生ずるというのはかなり突飛な考えかもしれない。それがなぜ可能かを証明することもできてはいるが、今はそれを仮定することで、C and C 構文の特徴が説明されうることを述べておきたい。

もしも、このような音声化・具現化が可能であるとすれば、C and C 構文が同じ語比較級の繰り返しでなければならない(特徴[1])ということは自動的に説明されることになる。なぜなら、Deg0 に移動されているのはただ一つの形容詞のみだからである。Deg1 と Deg2 には同一の形容詞の形しか反映されえないのである。異なる形容詞の比較級の等位構造 (eg. *bigger and stronger*) は(18)の構造にしか生じない。なぜなら、形容詞が移動される先は Deg0 一つしかなく、2 つの形容詞のうち 1 つは接辞と結びつけないことになってしまうからである。2 つの形容詞がそれぞれ Deg1, Deg2 に移動されるとしても、残った *and* を消すという操作が特別に必要になってしまう。また、構造(18)は C and C 構文としては成立していないので、漸次性の解釈とは結び付いていない。それゆえ、それぞれの比較級形容詞が独立した解釈しかもたないのは自然である。

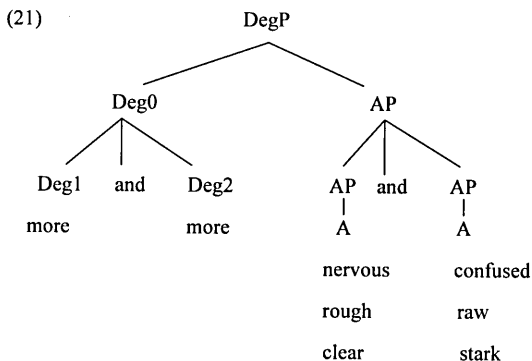
特徴[2]の迂言型比較の C and C 構文が **more difficult and more difficult* のようにならないことも説明される。そもそも C and C 構文は Deg more だけが *and* で結ばれて繰り返される構造になっているからである。構造(18)に 2 つの *more difficult* がたまたま生

起したとしても、そこから一方の *difficult* だけを削除するという特殊な規則を想定する必要はないことになる。

C and C 構文に(19)の構造を仮定すると、次のような例も説明される。あまり頻度は高くないが、迂言型の C and C 構文の形容詞が等位構造を持つことがある。

- (20) a. He looks more and more nervous and confused. (COCA 2012 WEB)
 b. And still those Russian words spewed out of her, her voice getting louder and louder, more and more rough and raw. (COCA 2017 FIC)
 c. These differences could not have been resolved by an election, but I think that now, those differences will only become more and more clear and stark. (COCA 2012 WEB)

C and C 構文が(19)の構造であるとするれば、(21)のように記述することも可能であろう。



特徴[3]は C and C 構文では、*and* が省略されないということである。これについては、今のところは、Deg に *and* Deg が後続する形式であってはじめて C and C 構文になると認識するからと仮定する。C and C 構文の Deg0 の中に Deg1 *and* Deg2 *and* ... Degn のように、*and* Deg が並べば C and C 構文となりうるが、Deg, Deg となるともはや形式が守られておらず、C and C 構文とみなされないからとしておくにとどめたい。

C and C 構文に *than* が共起しないこと (特徴[4]) については上ですでに触れた。Deg0 は C and C 構文であり、通例の比較の Deg ではなくなっている。「次第に・・・にな

る」という漸次的変化を意味する表現であり、何かと比較しようというものではない。than が比較対象を導くものであるとすれば、それが存在する必要はないのである。

最後に、英語の歴史的な変化との兼ね合いで考えてみたい。EEBO の検索結果から、C and C 構文の広まりは 16 世紀になってからではないかという推測をした。先にも述べたが、この時代は迂言的比較が広く用いられるようになった時期から少しあとである。比較級形容詞としてはもっぱら接尾辞比較が用いられている時代には構造 (18) しか等位構造を作ることはできなかった。その時代には C and C 構文は存在せず、たまたま同じ形容詞の比較級が並列されることがあったに過ぎない。それが、迂言的比較が持ち込まれて広まった 15 世紀以降、「比較要素」の繰り返しだけを取り出して漸次的変化の意味と結びつけることで C and C 構文ができた。いったん C and C 構文が認識されると、さまざまな形容詞について用いることができるようになっていったと考えることができよう。

5. おわりに

本小論では、比較級の繰り返しが漸次的変化を表すことについて、同じ語の比較級の繰り返しではなく、比較を表す Deg が and で結ばれた構造が漸次的変化の意味と結びついて C and C 構文となっていることを述べた。仮説として挙げた構造(19)が正しいとすれば、C and C 構文のいくつかの特徴が説明できる。一方で、同じ比較形の繰り返し(higher and higher) として音形を持つことになる仕組みが本当に可能なのか、ということは今後の検証を必要とする。

また、歴史的に迂言的比較が英語に広まった時期と、C and C 構文が広まった時期の関連性についてもより広く資料に当たって検証していかねばならない。

注

1 Curme (1931:505) は Comparison of Gradation (漸層比較)と呼んでいるが、最近では phrasal comparatives (Biber et al (1999)), reduplicated comparative (Jackendoff (2000)), repeated comparative (Swan 2017) などと呼ばれ、定まった名称はないようである。

2 COCA は現代アメリカ英語のオンラインコーパス the Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)である。本稿は 2020 年 11 月 30 日までの検索結果をもとにしている。ACAD は academic, MAG は magazines, FIC は fiction のそれぞれ

れのジャンルからの例であることを示している。

3 Biber et al (1999:537)によれば、接尾辞比較の繰り返しよりも *more and more* を取る形の方がより多く見られるとしている。このことは EEBO や COCA を見る限りにおいてはあてはまらないように思われる。さらなる検証が必要である。

4 比較級 *more* について、COCA に *more, more and more* という表現が 4 例見つかるが、「次第により多く」という意味ではないことに注意が必要である。(i)では、一つ目の *more* は後続する *more and more* は独立していて、「もっと、もっともっと」と解釈される。

(i) But crack cocaine was a product deliberately developed in illicit drug laboratories in the early 1980's, and deliberately and mercilessly marketed, if you please, along inner city sidewalks, alley ways, even schoolyards - a low priced, fast acting narcotic that will expire quickly and provoke a need for more , more and more. (COCA 1994 SPOK)

また、*smaller, smaller and smaller, larger, larger and larger, greater, greater and greater* といった例は 1 つも検索されなかった。

5 COCA には、比較級 *and* 比較級が *than* と共起する例はわずかに検出された。

(i)a. We have much land, much oil, much gas, many other natural resources and wealth, and God has not been stingy with us in giving our people intellect and ability but, nonetheless, we were living worse and worse than all of the other developed countries.

(COCA 1991 NEWS)

b. In the days prior to picking up the urn she had imagined Haddie in heaven, but after Ethel held what remained of Haddie in her hands, the physicality of ashes began to seem more and more real than spirit.

(COCA 2014 FIC)

6 *near* は *neah* の比較級である。

7 Early English Books Online (EEBO)は 15 世紀後半から 17 世紀末の約 7 億 5 千万語のイギリスの文学作品を収めている。本小論では English Corpora (<https://www.english-corpora.org/>) に収容されているバージョンを用いた。

8 樹形図(18)(19)で *Deg(P)* につけたインデックスは *Deg(P)* の区別のために便宜上付けたものである。

引用文献

安藤貞雄. 2002. 『英語史入門－現代英文法のルーツを探る－』東京：開拓社.

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Curme, George O. 1931. *Syntax*. Boston: D.C.Heath.
- Eastwood, John. 2009. *Oxford Practice Grammar*. Oxford, Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray. 2000. “Curiouser and Curiouser,” *Snippets* 1, 8.
- Murphy, Raymond, William R. Smalzer and Joseph Chapple. 2018. *Grammar in Use Intermediate*. 4th edn. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, Michael. 2017. *Practical English Usage*. 4th edn. Oxford: Oxford University Press.
- 宇賀治正朋. 2000. 『英語史』東京:開拓社.
- Zwarts, Joost, Petra Hendriks and Helen de Hoop. 2005. “Comparative Paths to an Optimal Interpretation,” In *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 9, ed. by Emar Mier, Corien Bary and Janneke Huitink, 553-563. Groningen: Groningen University.

コーパス

- Early English Books Online (EEBO) <https://www.english-corpora.org/eebo/>
- The Corpus of Contemporary American English (COCA) <https://www.english-corpora.org/coca/>

辞書

- Oxford English Dictionary Online* (OED) <https://www.oed.com/>

(東京学芸大学 准教授)